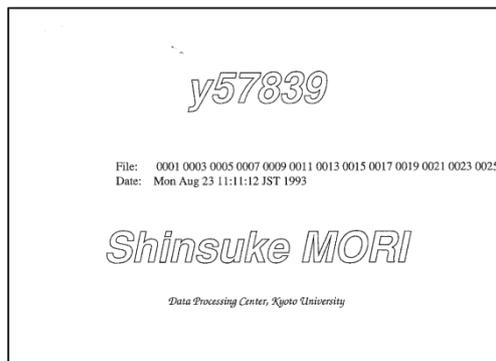


Vol. 23, No.1 号の発刊に当たって
 京都大学学術情報メディアセンター
 森信介

四半世紀前の学生プログラム相談員が4月からセンター長となっている。当時の組織名は大型計算機センターであった。プログラム歴は10年少々あったが、FORTRANは電気系学科の演習程度の知識であった。大した相談はこなかったこともあって、その程度で務まったようだ。何冊かの書籍とスパコンの利用枠を頂いた。図はそのアカウントでのプリンター出力の表紙である。当時の「上司」のデザインらしい。現在は情報環境機構の職員である。



当時のスパコンの用途は数値シミュレーションがほとんどであった。四半世紀を経て計算機の用途は飛躍的に広がっている。あらゆる学術領域において無縁ではなくなっている。当時言語処理の研究室の学生であったので、計算を言語などに適用するという事は日常的に行っていたが、データ量が少なくスパコンの出番はなかった。私のスパコンの利用枠は、ほとんどプリンターの利用に使った。当時から現在までの間に World Wide Web やセンサーなどの普及により言語処理を含む様々な課題にスパコンやアクセラレーター付きの計算機クラスタが使われるようになった。特に画像や音声などの生成課題においては大量の実例があるのでなおさらである。学生プログラム相談員がセンター長になるなど大した変化ではない。

最近、自身の研究として人文情報学にも取り組んでいる。いわゆる汎用コンピューターは大活躍である。この分野はスパコンにはまだまだデータ不足という感もあるが、作家の手稿はいうまでもなく、古地震に関する庶民の手記の画像などがどんどんデジタルアーカイブに含まれていくのを目の当たりにしている。他には、いわゆるウェットラボの実験記録もあろう。そのような *in vitro* あるいは *in vivo* のデータと、旧来のスパコン用途による *in silico* の結果とを統合して大規模に推論するところまで来ている。ハイパフォーマンスコンピューティングは遍在しつつある。

学術情報メディアセンターは、旧来の計算科学のみならず、各メディアの知的処理、ネットワークやデータベースを対象に研究・開発を進めている。部門・分野の数は限られており *Omnipresent* とはならず、また *Omnipotent* からも程遠いが、昨今の急速な需要の高まりに応えるべく教職員一同日々活動している。今後も皆様の研究教育活動に資するように尽力していく次第である。